





FOREWORD

Hakan Karar カラル ハーカン

13世紀、ヨーロッパから中東に向けた数度に渡る十字軍の遠征によって、オリエントラグ、特にトルコ絨毯は海を渡り、ヨーロッパ社会に登場しました。見たこともない柄や色。その美しさ、珍しさに魅了された人々は、敷物という実用価値ではなく、装飾品、あるいはステイタス・シンボルとして受け止め珍重しました。

一つの表れが、中世ヨーロッパ名画への登場です。去年は4作、今年も4作をご紹介します。敷物としての実用性から、古い絨毯はすでに磨耗して破棄され、当時のものは実物として残るものは少なく、絵画に克明に描かれた図柄が貴重な資料となっています。人気のある模様は、作家の名前で呼ばれ、たぐさんの類型品が出回りました。例えば、昨年ご紹介したロトウデザインがそのひとつです。

表紙に使った明るい文様の布は、中央アジアのウズベキスタンのミュージアムにある刺繍、スザニの大作です。スザニとは、ペルシャ語で「針」を意味します。手頃な大きさの布、木綿が一般的ですが、高価なものは絹地を使うこともあり、手分けをしてステッチし、最後に縫い合わせて予定のサイズに仕上げます。

キリムハウスでは、昨年からスザニを片面に、裏面には同じウズベキスタンの縞模様アトラスをベルベットで織り上げた布を合わせてクッションに仕立て、販売しています。手仕事が廃れる一方の現代に対して、産地から起きている復興運動を支援しようとする人々の努力が結晶した作品と言えます。

繰り返しになりますが、オリエントラグという呼び名は、統一されているわけではありません。イギリスではカーペット、アメリカではラグと呼ぶのが一般的です。また古い文献では、オリエントラグ、イスラムカーペット、トルコラグなどと呼び方はいろいろです。私は、「オリエントラグ」とか「絨毯」など状況に応じて使い分けています。



Cover illustration

“Togora Palak” decorative embroidery early 20th century
Tashkent

Title page

Safavid Rug fragment 16th century
75 x 109 cm

Kilim House Collection, Tokyo

The Safavids ruled from 1501 to 1722 and, at their height, they controlled all of modern Iran, Azerbaijan, Bahrain, Armenia, most of Georgia, the North Caucasus, Iraq, Kuwait, and Afghanistan, as well as parts of Turkey, Syria, Pakistan, Turkmenistan and Uzbekistan.

Most of the Safavid rugs are early samples of Kirman, Isfahan or Northwest Persian rugs. But they can not be defined as the Persian ones.



Oriental Rugs & Kilims
Vol II

オリエンタルラグ&キリム Vol II

AKSARAY MIHRAP KILIM
made in Aksaray mid 19th century
108 x 190 cm



Hans Holbein the Younger (German, 1497/98 - 1543)
The Merchant Georg Gisze
signed and dated 1532
oil on panel, 97.5 x 86cm

ラグ、そしてキリムとは

ラグ(rug)やカーペット(carpet)は、ウール、絹、木綿などの自然素材を天然染めした糸を使って、手織りした敷物のことです。もともと日本になかったために、英語がそのまま日本語になって定着しました。ラグは縦糸となる地糸に一目ずつリンク状に糸を埋め込み(パイル)、一段終わったところでリンク部分をナイフやハサミで切り、それを起毛して作ります。また、ここに紹介したオリエンタル・ラグのオリエンタルとは、ヨーロッパから見た東方のことで、ラグやカーペットを生産する技術レベルが高く、生産量も格段に多いトルコから中央アジアにかけての一带を指しています。

羊毛や絹などの素材を使った色彩豊かな手織りの敷物は、世界中にあります。エジプト、ヨーロッパ、南米にもあります。米国では、ネイティブアメリカンのラグが知られています、日本では絨毯という呼び名が一般的ですが、九州の鍋島、関西の堺などで、江戸末期頃から綿糸を使ったものが作られたものの、広く普及はしませんでした。日本に、ウールを使った絨毯産業が根付かなかった理由は、雨が多く高温多湿の気象条件が、材料となる羊の飼育に適さなかったことに尽きます。

キリムは、着物の帯に代表される、日本のつづれ織りと同じような平織りの製品を指します。オリエントに住む人々は、年間を通して広大な大地を移動する遊牧の生活をしていました。移動生活に欠かせない生活用品であるテント、敷物、家財道具を収納する袋、ベビーベッドなどは、飼っている羊の毛を使って地厚な平織りの布を織り、それを使いました。これがキリムです。

キリムは各家庭で織られるので、一つとして同じものはありません。現代では遊牧から定住へと生活スタイルが変わり、かつてのようなキリムは姿を消していました。そのため、かつての伝統的なキリムはますます貴重なものとなっています。幾世代にもわたって引き継いできた染めや柄の芸術性は、その希少性とともに高い評価を受けています。特にトルコのキリムは、多くのコレクターを魅了しています。

日本人の暮らしの中に静かに浸透中

多くの日本人の生活は、あらゆる面で大きく変わりました。部屋の中も、畳からフローリングになりました。高齢社会が進むに連れて、立ち座りが楽な椅子とベッドを選ぶ人たちがますます増えています。しかし、フローリングは足に冷たい、足音が下の階に響く、施工費が高くつくなどの理由で、テトロンやナイロンのような合成繊維の敷物を床に直接貼りつける工法が一般的にとられるようになりました。さらには、汚れたら、そこだけ剥がして取り替えるタイルカーペットと呼ばれるものまで、普及しています。

こうした中で、何かもの足りない、味気ないと気づいた方々が私の店に来られます。もともと日本の家の中は、畳、襖、障子など自然素材によって形づくられた空間でした。そのため、化学繊維の足触りに違和感を持つDNAがあるのかもしれない。北欧家具やアジアンモダンの家具を取り入れてみたけれど、化繊マットを敷き詰めた足元はいまひとつしっくりこない、そうおっしゃる方々も少なくありません。



KARATCHOPH KAZAK RUG
made in South West Caucasus early 19th century
165 x 216 cm



Master of Saint Giles (1490 - 1510)
The Mass of Saint Giles
signed and dated 1500
oil and tempera on wood, 41.6 x 45.7cm

National Gallery London

羊毛、絹、綿などの自然素材を使い、天然染めしたオリエンタルラグやキリムが、日本人の洋風の新しい生活空間に欠かせないアイテムとして、静かに浸透し始めているように思います。部分的に床に敷いたり、ソファを覆ったり、椅子の背にかぶせたり、タペストリーとして壁に飾ったり…。世代や経済力を超えて、何よりもご自分たちの暮らしに合ったオリエンタルラグやキリムを取り入れていると実感しています。そのお手伝いをするのが、今では、私自身の生き甲斐にもなってきました。

使いながら楽しめるコレクションを我が家に

2017年秋、レオナルド・ダビンチの絵画「サルバトール・ムンディ」（世界の救世主）がアメリカのオークションで、4億5000万ドル（約510億円）で落札され、世界中がどよめきました。オリエンタルラグの場合はといえば、2013年のアメリカのオークションで、17世紀（約360年前）のペルシャ絨毯が約33億円で落札されました。買い手は、かつてのラグの産地で、今は石油で稼ぐ中東の国とのことです。新しい国立ミュージアムに展示するためという話も聞こえています。

ダビンチには及びませんが、日常な生活用品であるラグが、絵画のように、その希少性を評価されているというわけです。私の店で買い求められるお客様には、消耗品ではなく、子々孫々、家に伝わる備品として使っていただきたいとお願いしています。そのためもあって、最近、絨毯のクリーニング部門を新設し、終生のパートナーとしてのお付き合いをしていただけるような体制も整えました。

中表紙に掲載した古いラグは、キリムハウスのコレクションの中で最古のものです。敷物の古さは、専門機関において繊維の炭素含有量を測定してもらえばわかります。このラグには宝石と同じような鑑定書が添えてありますが、そこには16世紀中頃と書いてあります。

現代は、かつてラグやキリムを生産していた国ですら、オークションでミュージアムの展示品を買い求める時代です。反面、その価値をいち早く認めた欧米には、充実したコレクションと研究体制を整えたミュージアムがいくつかあります。ベルリンにあるドイツ国立博物館、ニューヨークにあるメトロポリタン美術館は、質、量ともに圧巻のコレクションを誇る代表格と言えます。

個人的には、ロンドンにあるビクトリア&アルバート・ミュージアムが好きです。ペルシャ絨毯を自ら織った著名な工芸家ウィリアム・モリスが担当して収集した展示品の中には、繊細な花鳥風月模様のペルシャ絨毯が多く見られます。ついでながら、入場無料というイギリスの国立美術館の仕組みにも感動しました。もう一つは、ロシアのサンクト・ペテルスブルクにあるエルミタージュ美術館。ネバ川に面したかつてのロマノフ王朝の宮殿を活用した壮麗な建築には圧倒されます。ここでは中央アジアの古墳から出土した世界最古（紀元前5世紀頃）のオリエンタルラグを見ることができます。

このように、ラグには、歴史的価値、美術品としての特性、技術的特性など、さまざまな要素が凝縮しています。日々の暮らしの中で使いこなしながら、その奥深さに触れることができるもの、それがラグやキリムならではの魅力です。

一枚のラグ、一枚のキリム、そこから始まる我が家にしかないコレクション。始めてみては、いかがでしょうか。



ERZURUM KILIM

made in Erzurum early 20th century

120 x 167 cm



JOHANNES VERMEER (Delft 1632 - 1675)

A Maid Asleep

signed and dated 1656

oil on canvas, 87.6 x 76.5 cm

Metropolitan Museum of Art New York

シルクロードは、カーペットベルト

中国の特産品である絹を地中海世界に運んだ複数の経路は、総称してシルクロードと呼ばれています。「長安―天山回廊の交易路網」はユネスコの世界遺産です。

ラグやキリムの産地は、大きく分けると、トルコ、コーカサス、イラン、トルクメニスタンなどの中央アジア、そして中国北西部であり、その一帯は「カーペットベルト」と呼ばれますが、そのままシルクロードに重なっています。

では、このベルト地帯で、優れたラグやキリムが生産されるようになったのは何故でしょうか。それは内陸アジアに共通する過酷な自然環境では、農耕が十分にできなかったからです。その代わりに、羊やヤギを飼育する牧畜業が主力となり、原材料である羊毛が潤沢に供給できました。また、この地域に住む人々の居住形態が移動生活なので、丈夫で温度調節に優れた毛織物、特にラグやキリムが欠かせない家財道具であったことです。さらには、交易路と産地が重なっていたので、生産と流通が直結した地域になりました。絹を運ぶ道は、ラグやキリムの通る道でもあり、その先にはヨーロッパという一大市場が広がっていたのです。

中東では、さまざまな染織の技術が生まれてきたといわれています。たとえば、紋織の一種ダマスクはシリアの首都ダマスカスに、ガーゼは絹織物の産地で知られたパレスチナのガザ、毛織生地のもスリンはイラクのモースルにそれぞれルーツがあるという具合です。また、中央アジアにも、絨や刺繍などの美しい製品があります。ウズベキスタンのオアシス都市フェルガナでは、ベルベット(ビロード)を織る工房を見学したことがあります。パイルを作ってハサミで切る工程は、羊毛と絹糸という素材の違いはあっても、ラグやカーペットの織り方と同じことに気づきました。その技術のルーツがどこなのか、残念ながら、まだ調べてはいませんが。

カーペットベルトに重なるイスラム文化圏

カーペットベルトに共通する重要な要素は、この一帯が、ほぼイスラム圏に重なっていることです。イスラム教徒は、メッカに向かって、日に5回お祈りをします。モスクの床には、大きなカーペットが敷かれています。モスクの外では、ひざまずいて祈る時に足元に敷く、小さなサイズのカーペット(サッジャーダ)が必要になります。このようにイスラム文化とカーペットは密接に繋がっているため、イスラム文化圏で、カーペットの生産が盛んになり、さまざまな技法を開発する動機となったことは間違いなくと思います。

カーペットやキリムに関する研究は、一般的にはイスラム美術の中に位置づけられています。広く世界を見ると、カーペット研究は産地や年代、材料や技法を特定すること、そして、カーペットに関わる社会、経済、文化の特徴を明らかにすることを課題としています。そこで、染織研究、化学分析、美術、歴史、経済など、様々な専門分野からアプローチし、多分野の研究成果を持ち寄って、解明を進めているようです。ドイツ、イギリス、アメリカにおける研究が特に進んでいて、たくさんの著作が継続的に発行されています。



SEWAN KAZAK RUG
made in South West Caucasus early 19th century
182 x 219 cm

日本では国立民俗学博物館が創設20周年記念特別事業として1994年に「絨毯:シルクロードの華」を開催し、記念誌(杉村棟、1994年、朝日新聞社)が発行されました。それ以前も以後も、このレベルの展示会、解説書の発行はなかったように思います。そして、最近、ふと本屋で見かけて買った『絨毯が結ぶ世界:京都祇園祭インド絨毯への道』(鎌田由美子、2016年、名古屋大学出版会)という本にも感動しました。厚さが4センチもある大著で、日本人の研究者により日本語で出版されたことに驚いたのです。著者お二人ともにイスラム美術の研究者です。

イスラム美術についても触れたいのですが、それ自体が非常に大きなテーマなので、範囲とする分野を紹介するにとどめます。『大系世界の美術第8巻 イスラム美術』(1972年12月、学習研究社)によると、建築、都市計画、絵画、書、装丁、アラベスク、陶器、ガラス、金工、彫刻、染織工芸を解説しています。ラグやキリムは、染色工芸のなかの一分野に入ります。総括として、イスラム世界の特徴は「民族と文明の多様性と統一性」を挙げています。日本からは比較的遠いイスラム文化ではありますが、この文脈でオリエンタルラグとキリムを読み解く作業も、知的刺激の多いものではないでしょうか。



Anthony van Dyck (Flemish 1599 - 1641)
Lucas van Uffel
signed and dated 1622
oil on canvas, 124.5 x 100.6cm

Metropolitan Museum of Art New York





5

WEST ANATOLIA KILIM

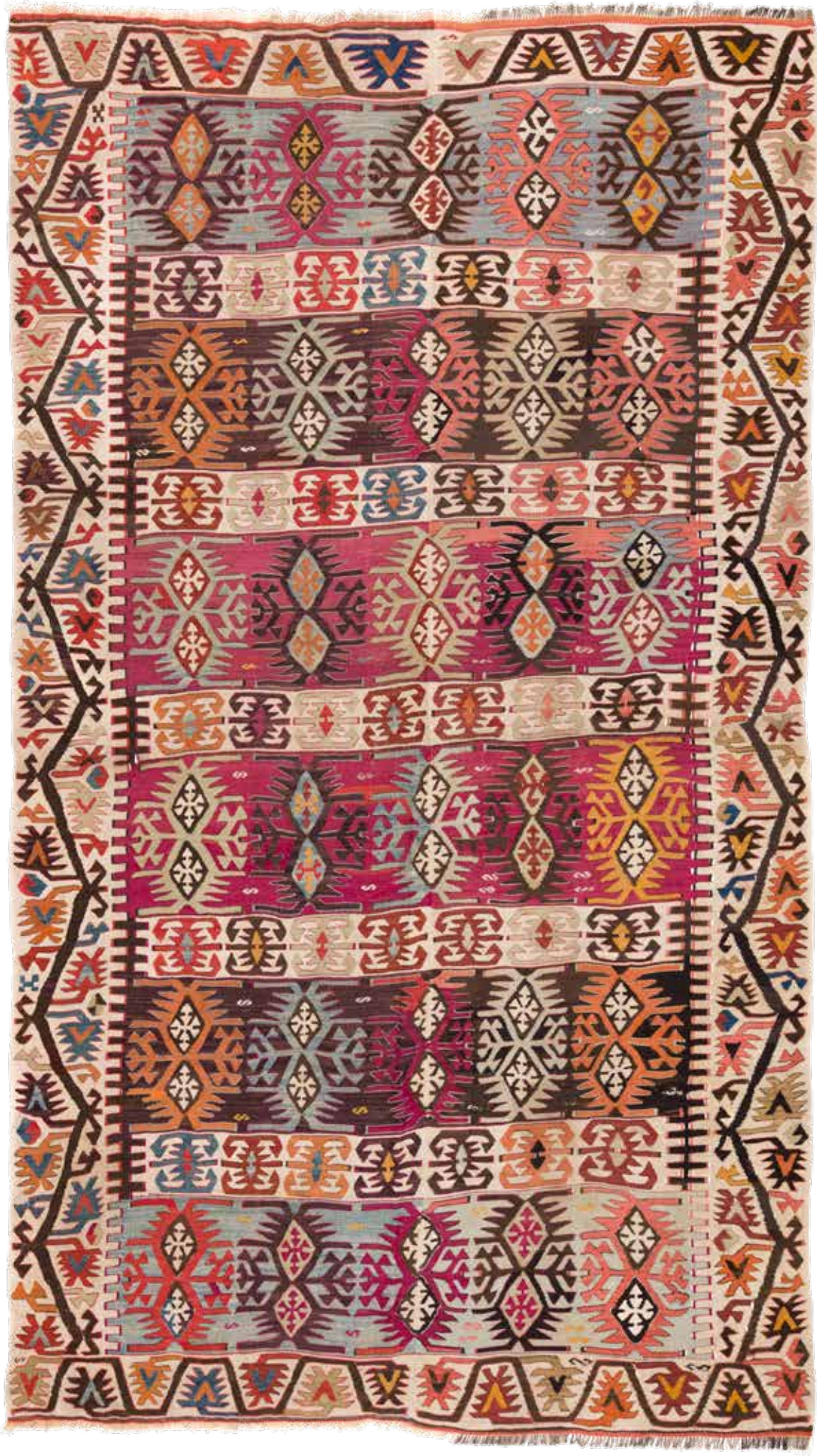
172 x 300 cm



6

ALEPPO KILIM

160 x 315 cm



NIGDE KILIM

143 x 250 cm

7



8

ADİYAMAN KILIM

163 x 220 cm



9

SIVRIHISAR KILIM

144 x 201 cm



10

HOTAMIS KILIM

123 x 171 cm



11

CAUCASUS RUG

127 x 294 cm



12

SELJUK RUG

184 x 295 cm



13

HOLBEIN DESIGN RUG

198 x 272 cm



14

PELENG PATERN(CHINTEMANI) RUG

179 x 222 cm



15

CAUCASIAN SOUMAK

223 x 275 cm



16

CAUCASIAN SOUMAK

206 x 336 cm



17

HEREKE SEVEN MOUNTAIN'S FLOWER DESIGN RUG

202 x 287 cm



18

SHIRVAN RUNNER

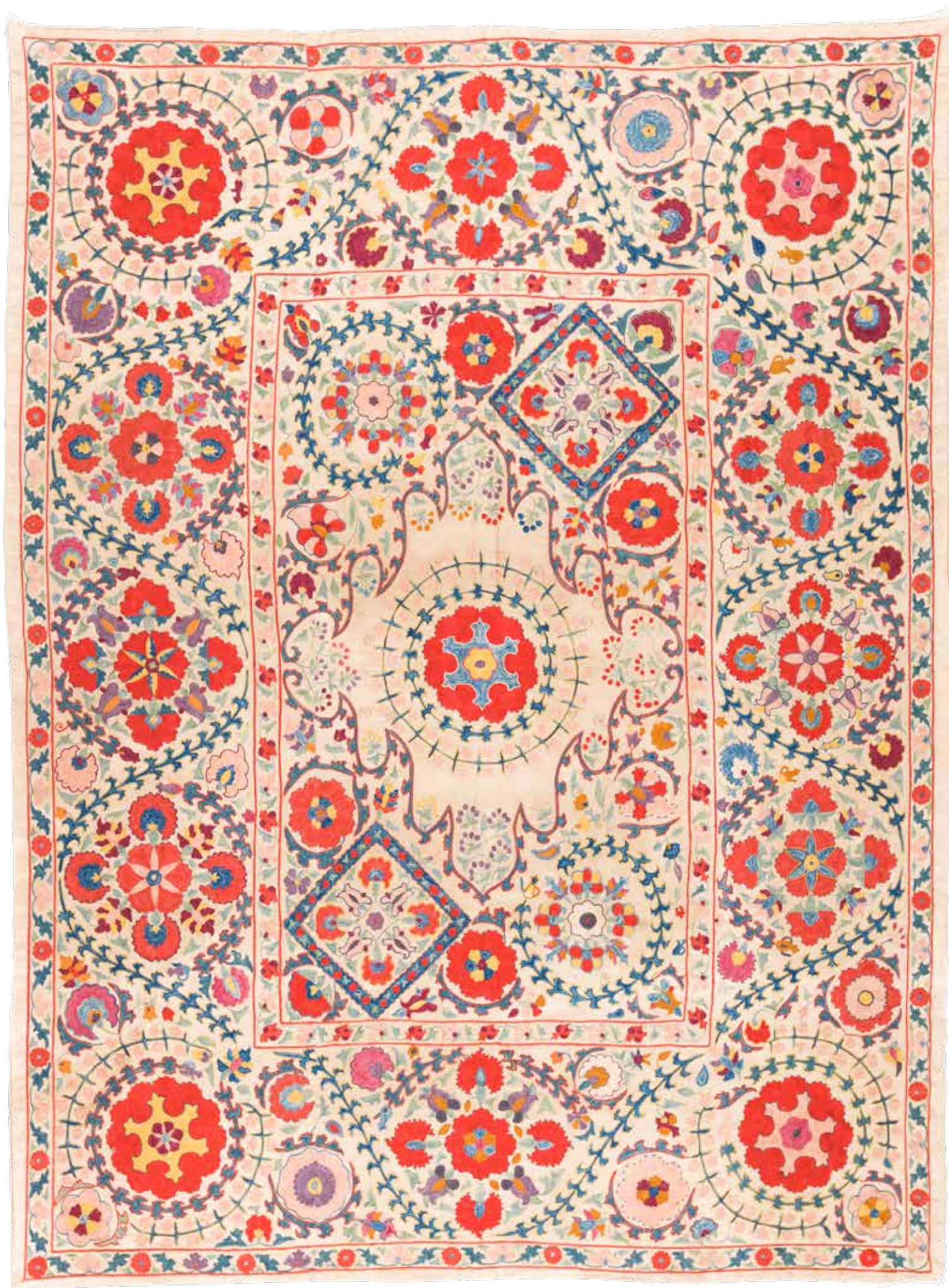
91 x 316 cm



19

SHIRVAN RUNNER

99 x 297 cm



20

SUZANI UZBEKISTAN

203 x 236 cm

ORIENTAL RUGS AND KILIMS VOL II
オリエンタルラグ&キリム Vol II
by Hakan Karar カラル ハーカン



Organised by

青山キリムハウス

(株式会社アララット・インターナショナル)

〒150-0002

東京都渋谷区渋谷 2-2-13-1F

Tel: 03-5467-2622

E-mail: info@kilimhouse.com

Url: <http://www.kilimhouse.com>

AOYAMA KILIM HOUSE

(ARARAT INTERNATIONAL CORPORATION)

2-13-1F, Shibuya 2-Chōme,
Shibuya, Tokyo,
Japan 150-0002

Tel: +81-3-5467-2622

E-mail: info@kilimhouse.com

Url: <http://www.kilimhouse.com>

© Hakan KARAR, Tokyo, November 2017

